

高校一年次の学習時間

—そのばらつきと背景を探る—

濱中淳子，山村滋，鈴木規夫（大学入試センター）

高校生を学習に向かわせるため、学力試験の導入を前提にした入試改革の必要性が説かれるようになってきている。しかし、学力試験は本当にいまの高校生たちを学習に導くのだろうか。そもそも、高校生たちの学習行動がどのようなものなのか、十分に明らかにされているわけではない。本報告は大学入試センターが実施している質問紙調査のデータを用いて、進学中堅校に通う高校1年生の学習行動とその背景を探るものである。

1 本報告の目的

大学生の学力低下が問題視されている。大学入学をめぐる選抜競争の弛緩や学力不問入試の拡大に伴って、基礎学力もおぼつかない学生が入学するようになった。高校生を積極的な学習に向かわせるため、何らかの学力試験を取り入れる必要があるのではないか。こうした認識のもと、現在では、中央教育審議会など政策論議の場でも、入試改革の具体像を求めた模索がはじまっている¹⁾。

たしかに、政策論議の場で参照されている資料をみると、高校生の学習離れが進んでいる様相をうかがい知ることができる。たとえば、2005年11月に全国の高校3年生を対象に実施した東京大学大学経営政策研究センターの調査データは、ふだんの学校外での学習時間を「まったくなし」とする生徒が4割を超えている実態を明らかにしている。また、全国4地域の高校2年生を対象に1990～2006年にかけて4回実施されたベネッセ教育研究開発センターの調査データは、ふだんの学習時間が、とりわけ中間層で大きく減少していることを語っている。偏差値50-55と分類される生徒たちの学習時間は、112.1分、83.6分、67.0分、60.3分と推移しており、わずかに十数年で半減している。

なるほど、高校生の学習時間が減少してい

るとなれば、それは大学教育にとっても、高校教育にとっても、決して望ましい状態とはいえないだろう。学力試験の導入が政策上の関心事項になるのも、当然のことに思う。しかしながら他方で、こうした議論の展開がやや短絡に過ぎるという印象も拭いきれない。部活動などに多忙な高校生たちは、もしかしたら「ふだん＝オフ」と「テスト期間＝オン」を切り分けながら学習を進めるようになってきているのかもしれない。だとすれば、オンの状態を見極めないまま議論を展開することには、少なからぬ危険が伴うのではないか。また、学習離れが起きているにしても、入試や学力試験が、もはや高校生たちの学習誘因にならないこともあり得る。改革の方向性は、学習行動の背景にまで迫ってから見定めたほうがいいはずだ。そもそも、参照データとして用いられている調査には、実施時期に難点がある。とりわけ、東京大学大学経営政策研究センターの調査が実施された時期は、推薦入試の結果が出るときと重なっている。合格者の一時的な学習離れは容易に推測でき、この時点の学習時間にどれほどの意味があるのか、吟味が必要であろう。

大学入試センター研究開発部では、こうした観点から、学習実態の全体像を捉えるべく、高校生を対象としたパネル調査（追跡調

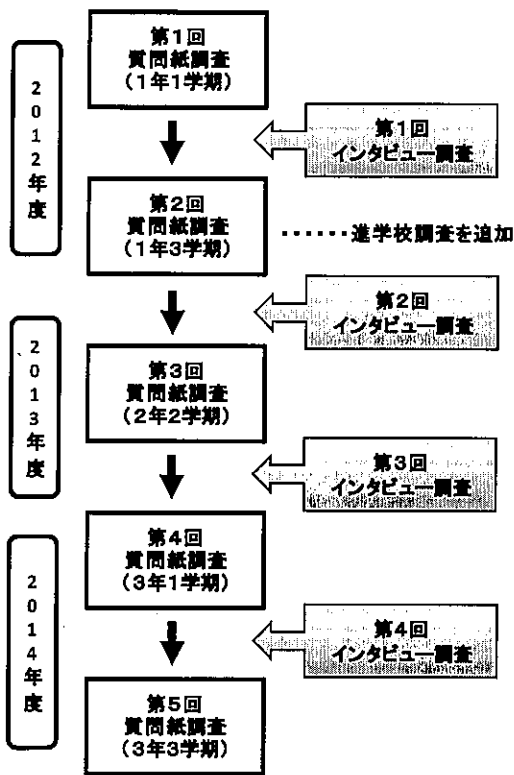


図1 パネル調査の流れ

査)を実施している(図1)。入学から卒業までの3年間に5回の調査を行うことになっているが、質問紙調査には、学習行動に関する質問項目のみならず、学習行動を左右すると思われる要因の項目(受験を考えている入試や友人関係、進路指導など)も組み込んでいる。学習行動の実態やその変化、そしてその背景まで多面的に探ることが可能なデータセットになる予定である。

調査対象には、その多くが一般入試以外の方法(指定校推薦や公募推薦、AO入試といった方法)で大学に進学する「進学中堅校」に通う生徒を設定した。さきに触れたベネッセ教育研究開発センターの「中間層で学習時間が減少している」という指摘を意識していることである。ただし、第2回の質問紙調査に限り、比較という観点から、同地域で一番手と認識されている「進学校」にも調査協力を依頼した。結果として、進学中堅校については首都圏の6つの公立高校、進学校について

は4つの公立高校の協力が得られている。

本報告では、すでに終えた2回分の調査データを用いて、高校1年次の学習時間をめぐる議論を展開したい。高校1年の5~6月と1~2月の学習時間がどのようなものなのか。これらの期間で学習行動に変化は生じているのか。進学校と進学中堅校の学習行動は違うのか。どれほどの差が見出されるのか。テスト期間の学習時間を考慮したとき、生徒たちの学習行動にどのような特徴が見出されるか。そして、学習時間は、どのような要因に左右されるのか。以上の点を明らかにしたうえで、知見から読み取れる実践上、そして政策上の課題を最後に示したいと思う。

2 ふだんの学習時間の分布状況

はじめに、学習時間の実態を素描しておこう。質問紙調査では、「ふだん(平日)」と「テスト期間中」のそれぞれについて「学校の授業以外の学習時間(=自宅や図書館、塾等での学習時間)」を六択で回答してもらっている。まず、「ふだん(平日)」の回答分布を示すと、図2のようになる。特徴として3点を指摘しておきたい。

第一に、進学中堅校には入学直後の時点から学習離れの兆しをみることができる。「まったくしない」と「30分ぐらい」の2つに注目すれば、半数以上の生徒がこれら選択肢に該当すると答えている。

第二に、進学中堅校の学習離れは、1~2月の時点でさらに強化している。回答の比率は、「まったくしない」が34.4%、「30分ぐらい」が38.1%。これら2つの選択肢を選ぶ生徒は、7割以上にまで増えている。

そして第三に、進学校の状況は異なっている。「まったくしない」、「30分ぐらい」と答える生徒はいるものの、回答が集中するのは「1時間ぐらい」と「2時間ぐらい」の2つである。また、「3時間ぐらい」、「4時間以上」とする生徒も一定数存在してお

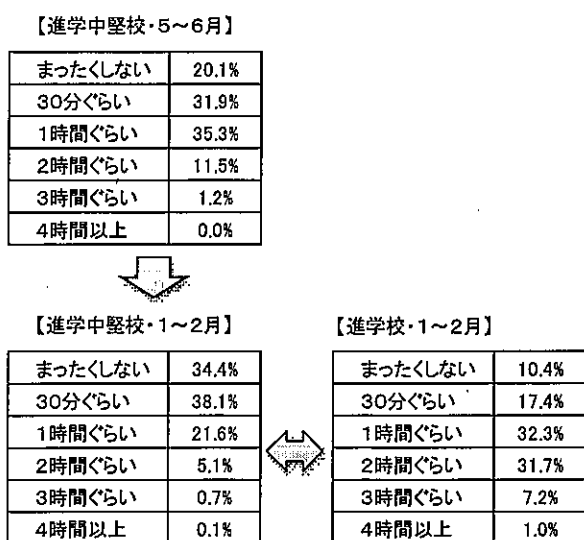


図2 学習時間の分布（ふだん：平日）

り、合わせれば、7割以上が「1時間以上」という分布になっている。進学中堅校とは対照的な結果である。

以上は基本的に、「中間層にあたる高校生の学習離れが著しい」とするベネッセ教育研究開発センターの見解と軌を一にする結果だといえるだろう。ただ、ここで、「テスト期間中」の学習時間を加えれば、どのような姿がみえてくるだろうか。次いで確認したい。

3 指標「ふだんの学習時間」の限界

図3にテスト期間中の学習時間分布を示した。ここからは、ふだん（平日）とは一転し、多くの生徒が学習へとシフトしている様相がうかがえる。5～6月の時点でもっとも回答が集中しているのは「3時間ぐらい」であり、比率は34.8%。「4時間以上」という生徒も19.5%おり、5割以上がテスト期間中に3時間以上の勉強時間を確保していることになる²⁾。

そして、この傾向は、1～2月になっても変わらない。2つの時期の回答分布に目立った差はなく、同時に進学校との差異も、ふだん（平日）ほど大きなものではないことがうかがえる。

以上の分布で類推されるのは、進学中堅校の生徒のなかには、ふだん（平日）は学習しないものの、テスト期間に集中して学習する「メリハリ型」が少なからず存在するということだ。試みとして、図4に示す分類を作成し、各類型の比率と成績分布を確認すれば、図5のとおりになった。この基準を用いたときのメリハリ型の比率は、32.0%、そしてこのタイプの生徒は、オンとオフを切り分けた学習行動をとることで、それなりの成績をとっていることがわかる。「平日多・テスト期間多」の生徒にこそ及ばないものの、成績が「上」もしくは「中の上」だというメリハリ型は28.0%、「中」まで含めれば、71.0%。ふだん（平日）もテスト期間中も学習しない生徒（平日少・テスト期間少）との違いが大きいばかりか、ふだん（平日）は勉強しているもののテスト期間中は少なめだという生徒（平日多・テスト期間少）より成績は良いという結果になっている。

学習には、積み重ねが大事だという側面がある。だからこそ「ふだん（平日）の学習時間」が重要な指標だとみなされているところもあるだろう。あるいは、何も無いときの学習状況こそが、学習意欲の適した指標と捉え

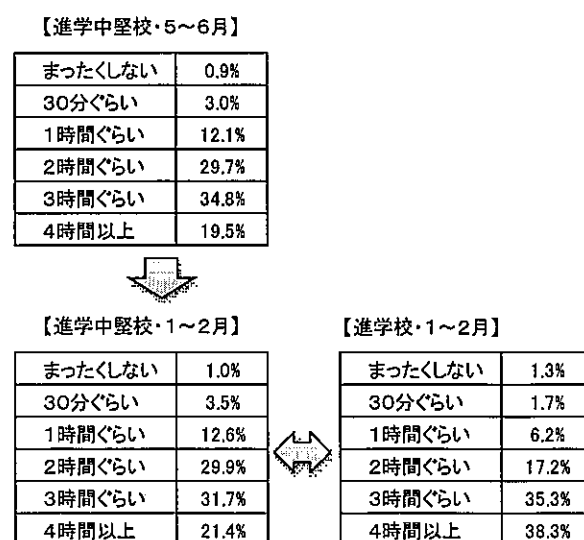


図3 学習時間の分布（テスト期間中）

		テスト期間	
		「2時間ぐらい」以下	「3時間ぐらい」以上
ふだんの 平日	「30分ぐらい」 以下	平日少・テスト期間少	平日少・テスト期間多 【メリハリ型】
	「1時間ぐらい」 以上	平日多・テスト期間少	平日多・テスト期間多

図4 学習行動の分類

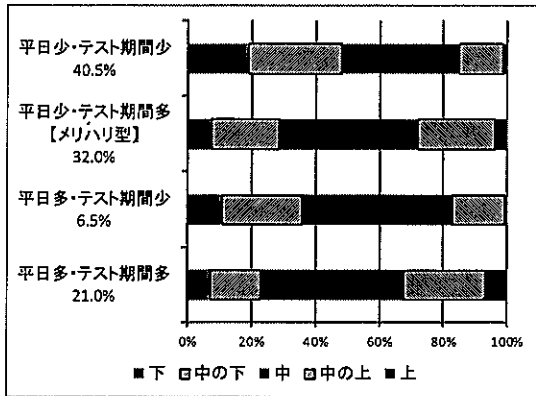


図5 類型別にみた成績分布 (進学 中堅校)

することもできる。しかしながら、実践的、政策的課題を抽出するという試みをする際に重要な意味を持つのは、進学中堅校の生徒における「オンとオフの切り替えによる学習行動」と「それによる成績の担保」という事実ではないだろうか。テスト期間中の学習時間を向上させる可能性は、ふだん(平日)のそれより大きいように思う。まず、テスト期間中に学習するようになる背景がどのようなものなのか。そのうえで、ふだん(平日)の学習時間を伸ばす要因は何であり、両者の関連をどのように判断すればいいのか。こうしたアプローチから学習時間の問題を検討することが効果的であると考えられる。

4 学習時間を伸ばす要因は何か

では、「テスト期間中の学習時間」と「ふだん(平日)の学習時間」はどのように規定されているのだろうか。最後にこの点を確認しておきたい。

学習行動に影響を与える要因については、

いくつか想定される。塾や性別のほか、次のような要因が挙げられよう。

第一に、部活動の有無である。部活動に多くの時間を割けば、それだけ学習時間を捻出することは難しくなる。ただ他方で、部活動は集中力を育むといった意見も根強く、だとすれば、逆に学習量にプラスの効果が認められることも考えられる。

進路のイメージが具体的になることで、学習量が増える可能性もあろう。行きたい大学や就きたい仕事が定まることが学習に向かわせる。目標の明確化がもたらすプラスの効果だ。

友人や教師の影響もある。熱心に学習する周りの友人に感化されながら、あるいは教師から学習の意義やキャリアを描くことの大事さを説かれることで、学習への意欲が沸くといった図式である。ただし、友人については、学内よりも学外の友人のほうが、有意な影響を与えていることもあり得る。

そして、本報告の目的からして、とくに注目しておきたいのが、入試の影響である。冒頭で触れたように、高校生たちを学習に向かわせる術として、学力試験の導入が政策論議の場で検討されている。推薦入試では学習の誘因になり得ず、学力試験で率いるべきだという発想だが、いまや学力試験の効力はどれほどのものなのだろうか。ここでは、現行の一般入試の効果をみることで、その答えを探ることにしたい。

以下では、第2回の調査データを用いて、「テスト期間中」と「ふだん(平日)」の学習時間の背景を重回帰分析で検証する。テスト期間中の分析に関しては、ふだん(平日)との関連性をみるため、その学習時間も独立変数として投入した。なお、対象は第一志望の進路を大学進学とする生徒のみとし、比較できるように進学校の分析も行った。その結果が、表1になる。

まず、中堅進学校におけるテスト期間中の

学習時間からみると、有意な効果を与えている要因が散見される。部活動や就きたい仕事の明確度、進路指導に認められるプラスの効果であるが、ここで入試要因の議論に入る前に、ふだん(平日)の学習時間の効果をみておくと、そこにはプラスの影響を確認することができる。さきに進学中堅校にはメリハリをつけながら学習を進めている生徒がいと述べたが、全体的な視野に立つてみれば、ふだん(平日)学習できない者は、テスト期間中も学習しないという傾向はたしかにある。学習時間の問題は、テスト期間中のみなら

ず、やはりふだん(平日)のことも念頭に置きつつ、検討を加えなければならないことを教えてくれる結果だといえるだろう。

では、テスト期間中、そしてふだん(平日)の学習時間に影響を及ぼす入試要因は何か。いよいよこの検討に入れば、テスト期間の学習時間については「指定校推薦ダミー」がプラスの効果をもたらしている一方で、ふだん(平日)の学習時間については、いずれの入試要因もなんら影響を及ぼしていないことがわかる。ふだん(平日)の学習時間は、部活動や進学したい学校や就きたい仕事の明

表1 学習時間の規定要因
(第一志望として、大学進学を念頭に置いている者のみ)

	テスト期間		ふだん(平日)	
	中堅進学校	進学校	中堅進学校	進学校
定数	66.648 **	71.613 **	2.816	35.556 **
塾ダミー	-6.289	1.692	19.999 **	3.758
女子ダミー	21.103 **	14.447 **	4.514 *	16.443 **
部活動ダミー	11.268 *	22.178 **	-5.939 *	-22.673 **
進学したい学校(明確度)	-0.040	3.305	5.363 **	12.704 **
就きたい仕事(明確度)	7.521 **	-1.671	2.896 **	2.215
勉強に熱心な学内友人	-0.709	10.359 *	0.340	15.032 **
勉強に熱心な学外友人	-4.019	2.690	3.575 *	4.745
進路指導	1.635 **	1.759 **	0.939 **	1.241 *
指定校推薦ダミー	21.031 **	-19.514	-1.794	-55.196 **
公募推薦ダミー	4.771	26.984	-1.300	1.479
AO入試ダミー	-0.568	-1.458	-5.108	13.763
ふだん(平日)の勉強時間	0.675 **	0.633 **		
調整済み決定係数	0.212	0.350	0.105	0.081

**1%水準で有意 *5%水準で有意

【変数の作成方法】

- 従属変数 (平日の勉強時間は独立変数としても使用)
学習時間... まったくしない = 0, 30分ぐらい = 30, 1時間ぐらい = 60, 2時間ぐらい = 120, 3時間ぐらい = 180, 4時間以上 = 240, として設定
- 独立変数
塾ダミー... 塾に行っている = 1, 行っていない = 0, というダミー変数を作成
女子ダミー... 女子 = 1, 男子 = 0, というダミー変数を作成
部活動ダミー... 部活動をしている = 1, していない = 0, というダミー変数を作成
進学したい学校(明確度)... 進学したい学校は決まっていない = 1, おおまかには決まっている = 2, 決まっている = 3, として設定
就きたい仕事(明確度)... 将来就きたい仕事を選択肢から選んでもらい、その選択に対して尋ねた回答を利用。他の仕事でもかまわない = 1, とりあえず就きたい = 2, できれば就きたい = 3, ぜひ就きたい = 4, として設定
勉強熱心な学内友人... 学内の友人は勉強を頑張っている = 1, 頑張っていない・わからない = 0
勉強熱心な学外友人... 勉強を頑張っている学外の友人との付き合いが多い = 1, 付き合いはない = 0
進路指導... 学校の先生から次のことをいわれるかどうかについて尋ねた4択の回答を、それぞれ1〜4で得点化し、足し合わせる。「社会で生活していくとはどういうことか、話してくれ」「できるだけいい学校への進学を目標にしよう」「楽な方向に流されて、進路を選ぶことはやめなさい」と言われる」「勉強時間を多くとるように言われる」「将来の仕事について、具体的に考えるように言われる」
指定校推薦ダミー・公募推薦ダミー・AO入試ダミー... もっとも真剣に受験を考えている入試を1つ選んでもらう項目について、一般入試をベースにした3つのダミー変数を作成

確度，学外友人や進路指導の影響のなかで増減することはあっても，受験を考えている入試で違いは生まれないのである。

以上の結果は，きわめて示唆的である。まず，学習の誘因が一般入試ではなく指定校推薦だというのは，いわゆる一般的な理解を覆す結果だといえる。テスト期間中に限れば，指定校推薦での進学を考えている生徒は，一般入試で進学しようとしている生徒よりも学習している。数年後にある学力試験より，継続的に良い成績を収めておかなければならないことの方が，大きなプレッシャーになるということだ。加えて一般入試は，ふだん（平日）の学習時間を向上させているわけでもない。学力試験を導入したところで，どれほどの効果があるのか。その悩ましさがかげえる結果だといえる。

なお，進学校には，逆に指定校推薦志向にマイナスの効果が確認される。進学校の場合，そもそも一般入試以外の方法で進学しようとしている者がかなり少数であり，参照程度の結果に過ぎないが，指定校推薦での大学進学をねらっている生徒のふだんの勉強時間が 55 分ほど少ないのは興味深い。というのは，学力試験導入の主張が，進学校の実態のみを基準に提示されているのではないかという危惧が示唆されるからである。

5 まとめと考察

本パネル調査では，並行して進学中堅校の生徒にインタビュー調査も行っている。すでに延べ 70 人ほどに実施したが，調査では入試と学習行動の関連の薄さを裏付ける声も多く収集された。学習に身が入らない理由について「入試は数年後なので，まだそんなに…」，「そういうことは 2 年生になったら考えようかと…」と述べるものである。いま現在の生活のことで手一杯であり，数年後の入試のことまで考えられない。いわば近視眼的

な生徒像が浮かび上がるものだった。

高校生の学習時間を伸ばすための手段はある。進学先や仕事を考えさせるキャリア教育，進路指導の継続はその例であり，高校側に提示すべき実践的課題として挙げられる。ただ，政策課題となるとどうか。少なくとも本報告の分析結果を踏まえる限り，学力試験を導入するにしても，近視眼的な生徒にプレッシャーを与えるものとして導入しなければ，その効果も小さいもので終わってしまうと考えられる。では，近視眼的な生徒も引き付けることができる入試のありようはどのようなものなのか。実施時期を早めればいいのか。しかし，その場合，レベルや高校教育との調整をどうするのか。少し考えただけでも，直面する難問はあまりに多い。

入試改革の議論を進めることが重要だ。ただ，その前提として共有すべき理解が，まだあまりにも乏しい。改革の限界も意識しつつ，さらなる実態理解に努める。いま，なによりも必要なのは，こうした作業である。

注

- 1) 現在進められている議論の前段階として，文部科学省委託調査「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」があった。いわゆる「高大接続テスト（仮称）」の提唱に結びついたものであり，詳細は佐々木（2012）を参照されたい。
- 2) 一方で，学習行動へシフトしているとはいえ，テスト期間中ですら，4 時間以上学習する生徒が 2 割しかいない結果ともいえる。合わせて指摘しておきたい。

引用文献

- 佐々木隆生（2012）『大学入試の終焉——高大接続テストによる再生』北海道大学出版会。